

# 全日本曲技飛行競技会

## ジャッジスクール 2011 (1)

米国 IAC 曲技飛行公認審判員 高木 雄一



### ●ジャッジスクールによるこそ

昨年 10 月、ふくしまスカイパークで開催された第 1 回曲技飛行競技会は、初開催ながらも非常に完成度の高い、素晴らしい競技会となりました。これには、実行委員会による入念な準備と統制の取れた運営、集まったボランティアの方々の団結、そして地元福島市の皆様の航空スポーツに対する深い理解があったからに他なりません。私は審判団を統括する主審として参加させて頂き、日本の曲技飛行競技の大きな飛躍のお手伝いできたことは大きな喜びです。

この競技会では画期的なことがいくつかありました。それらは、十分な技量を持つ曲技飛行競技者の参加。曲技飛行機の存在。マーカーが置かれた競技ボックス。更に、この競技会が正しく成立できたのは、ルールが存在と、ルールを基に公正に評価する複数の審判が存在したからではないでしょうか。日本での曲技飛行競技の普及を願う私としては、競技の要となる審判の養成過程を確立し、その審判たちが競技者の技量向上を支援できる環境を作りたいと考えています。今回から 5 回に渡って連載予定の「誌上ジャッジスクール」が、現役競技者の方々には評価基準の再確認に、また他の皆様には曲技飛行競技へのお誘いとなることを願います。

### ●なぜ曲技飛行なのか

FAA によると、曲技飛行の見解は「通常の飛行に用いられない、急激な航空機の飛行姿勢の変化、異常な飛行姿勢、急激な加速と減速を行

う飛行」としてしています。日常では得られない興奮を求めている曲技飛行もあるでしょうが、おそらく本来の目的は、操縦技術の向上、航空力学の研究、そして異常姿勢に陥ってしまったときにも冷静に、効率的に回復する操縦技術を得ることなどでしょう。曲技飛行訓練は飛行の可能性を広げ、安全性の向上へと繋がります。使用する機種と技量の範囲内で、基礎曲技飛行の要素を訓練に導入してはいかがでしょうか。

### ●曲技飛行と曲芸飛行

曲技飛行はまれに曲芸飛行とも伝えられますが、曲技飛行という言葉は大切にしたいと思えます。一般的に馴染みの深いのは曲芸飛行でしょうか。曲芸飛行とはスタントやエアショーなどの飛行で、観客が存在し、魅力ある飛行で人々を楽しませることが目的です。対して、曲技飛行はエアロパティクス、飛行技術の錬成を目的に、得られた技術を駆使し、スポーツとして飛行の精確さを競うものを指します。スタントやエアショーの飛行に飛行技術を表現する要素があるとしても、それは観客を主体に構成されません。主体となるものは飛行士本人、そして自身自身に挑戦を求める、それが曲技飛行です。

### ●競技としての曲技飛行

曲技飛行の経験はあるが、競技としての飛行は未経験という方は多くいらっしゃるでしょう。競技を目的としないレクリエーションの曲技飛行では、飛行の評価は飛行士の視線で行われます。例えば、ループ（宙返り）は「360

度の縦の旋回」であり、これに合致する飛行であれば、縦長のループや、終了高度を大きく下げた、通称「e ループ」であっても可となります。加えて、飛行がコーディネートされ円滑であれば、それは優と評価されることでしょう。

しかし、競技としてのループは、「開始と終了が同高度、機体の重心が真円を描き、風の影響を考慮してあること…」等、細かな規定がされています。飛行を評価するのは地上にいる審判。極端な言い方をすれば、それがどんな操縦であっても、地上から評価基準に則ったループが確認できれば、評価基準からの逸脱がないものとして満点である 10 点が与えられます。精確な飛行、10 点の獲得を目標に、競技者は可能な限りの努力をする。これが曲技飛行競技です。

競技者は、評価基準を含めたルールを理解することはもちろんのことですが、高得点のためには審判からの視点を考えて飛行することが求められます。フィギュアの判定が審判にとって的確なところはどこか。ループを例にすれば、飛行の場所が審判席に近すぎるとは、審判に対して真円を精確に表現できず、逆に遠すぎると判定が難しく、印象もよくありません。仮に失敗した場合、ルールの範囲内でその失敗をどう克服するかということも技術の一つです。つまり競技会では、審判と競技者の間で、常に駆け引きが行われていると言ってもよいでしょう。

レクリエーションとしての曲技飛行を行う方々も、単にロール（横転）やループ、スピンなどを行うのではなく、高度管理や進行方向の維持など、常に何かしらのターゲットを持って練習を行えば、競技会の参加も難しいものではありません。異なるのはその視点の変更と微調整です。曲技飛行競技に関する訓練を受け、いつか競技会に参加されてはいかがでしょうか。

## ●公正性と公平性

競技会に限ることではありませんが、飛行には安全が第一に尊重されます。目標は競技会を

遂行することではなく、事故を防ぎ、安全に最終日を終えることです。そして、一貫してルールに公正であることと、競技者が誰であれ常に公平であることが尊重されます。

飛行を評価する上で、競技者の経歴や評判が加味されたり、飛行性能に劣る参加機に自動的に高い評価を与えることは絶対に避けなければなりません。しかし、実際に審判として活動していると、これはとても難しいことだと気付かされます。過去にも、著名な曲技飛行士が競技会に参加し、そこでの飛行が疑問に残るものだったにも関わらず、出席した審判たちは一律に高得点を与えてしまい、大きな問題になったことがありました。このようなことを避けるため、審判にはあえて競技者の名前を見ないように努力する人もいます。

参加機が低出力の Piper J-3 Cub であるから高評価、又は高い飛行性能を有する Extra 300L であるから厳しく評価するようなことも避けなくてはなりません。機種に関わらず、常に評価基準に則った一貫した評価が求められます。

曲技飛行競技は最高速度や終了までの時間を競うレースではありませんから、仮に低出力の参加機であっても、技量次第で最新鋭機を相手に勝利を得ることは十分可能です。搭乗機種種の飛行性能ではなく、あくまで競技者間の技量の勝負。これこそが、曲技飛行競技の醍醐味です。

高木雄一(たかぎゆういち)

1971 年、長崎県生。神奈川県出身。カリフォルニア州リバモア市在住。

94 年に日本航空学園千歳校(当時)を卒業後、渡米し操縦士、航空整備士、教育証明等を取得。

2004 年から米国の曲技飛行競技会に参戦、08 年に IAC の審判資格を取得。現在は West Air, Inc.にて近距離貨物便(FedEx Feeder)の操縦士、Attitude Aviation, Inc.にて飛行機整備士および曲技飛行教官として勤務。

第 1 回全日本曲技飛行競技会主審として活躍。